

研究所だより

編集・発行

千葉県長生地方教育研究所
茂原市東郷富士見2300-1TEL 0475(24)9721・FAX 0475(23)4820
H P <http://www.choseikaikan.or.jp/>
メール kenkyujo@beach.ocn.ne.jp

「千葉県英語教育推進事業について」

千葉県総合教育センター
研究指導主事 森 庸 光

1 英語教育の動向

日本の英語教育は現在、大きな変革期を迎えようとしています。文部科学省は、教育再生実行会議第3次提言等を踏まえつつ、平成32年の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めています。その中の1つとして、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校に通じた英語教育の抜本的充実を目的とする「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(平成25年12月13日)を公表しました。また、「英語教育の在り方に関する有識者会議」を開催し、今後の英語教育の改善・充実方策についての報告(平成26年9月26日)がありました。今後新たな英語教育の在り方の実現に向け、小・中・高等学校における指導体制の強化が必須となっています。

2 千葉県の取組

千葉県教育委員会は、英語によるコミュニケーション能力を有し、グローバル化に対応した人材の育成を強化するとともに、外部専門機関と連携した効果的な研修を通して、教員の指導力及び英語力向上を図るための事業を実施しています。この事業には、「国による指導力向上事業」と「県による指導力向上事業」があります。

(1) 国による指導力向上事業(中央研修)

推薦を受けた小・中・高等学校の20名の教員が、英語教育推進リーダーを養成するための中央研修に参加しています。そしてこの研修を受けた教員が以下に述べる①と②の研修の講師となります。今後、更に県内各地域で英語教育推進の中核となり、活躍することが期待されます。

(2) 県による指導力向上事業

① 小学校外国語活動中核教員養成研修

外国語活動の充実のため、指導方法や児童が意欲的に取り組むことができる体験的な活動の研修を行います。また、学校での指導体制や校内研修の在り方など、中核教員として必要な知識を習得します。平成31年度までに、本研修を受講した教員が、学校で外国語活動の中核となって活躍することを目的としています。今年度は182名が参加しました。

② 中・高等学校英語科教員指導力向上研修

「授業は英語で行う」ことが基本とされ、今まで以上に、英語教員の英語力と指導力が求められています。また、千葉県教育委員会では教員及び生徒の英語力の達成目標を具体的に明示しています。成果指標として、平成29年度までに教員に求められる英検準1級程度の英語力を有する割合を高校教員75%、中学校教員50%、生徒については、中学校卒業時に英検3級程度を有する割合を50%、高校卒業時まで英検準2級程度を有する割合を50%と掲げています。そこで、中学校・高等学校については、平成30年までに英語科教員全員が本研修を受講することになっています。本年度は中学校175名、高等学校100名、特別支援学校中学部3名、高等部1名が参加しました。

③ CAN-DOリスト活用推進会議

指導と評価の一体化を通じて学習指導の在り方を見直し、授業改善を図るとともに、「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定を県内の全中学校の英語科主任等に対し、その意義や作成及び活用についての研修をしています。

本年度は3つに分けて取り組んでいます。

ア 全体説明会(各中学校1名)

イ 作成研修会(各中学校1名)教育事務所毎に設定

ウ 活用研修会(中学校・高等学校)

活用研修会の出席者

中学校 CAN-DOリスト研究協議会委員16名

高等学校CAN-DOリスト研究協議会委員20名

各学校で作成したCAN-DOリストの効果的な活用や授業と評価の研究を目的に研修をします。

講師 文教大学 国際学部教授 阿野幸一先生

明海大学 外国語学部教授 高田智子先生

④ 外国語指導助手・日本人外国語担当教員指導力等向上研修会

県内の外国語指導助手及び英語科教員が、チーム・ティーチングの効果的な活用法や外国語教育に関する諸問題について協議し、指導力の向上を図り、外国語教育の充実を図る目的で実施されます。

(3) 千葉県英語の学力状況調査

① 生徒の英語力を具体的な到達度として継続的に把握・分析する。(生徒の英語力確認)

② 生徒自身による英語力把握と目標設定につなげ、英語力向上への意欲化を図る。(学力向上)

③ 調査結果を踏まえ、研修内容の見直しを図るとともに、各種研究会や学校訪問等での指導助言に活用し、英語教員の指導力向上につなげる。

(指導力の向上)

④ 各学校は、調査結果を踏まえ、単元計画や年間指導計画、CAN-DOリスト等を見直し、指導体制の再構築を図る。(校内指導体制の確立)

以上の目的から、県内公立中学校及び公立高等学校全学年の生徒(千葉市立学校を除く)に英検IBA(Institution Based Assessment)検査を実施します。実施年度は平成27年度～平成29年度(3カ年)です。

3 今後の方向性

ここ数年で、英語教育への期待が更に大きくなっています。今までの、経験や実践を土台として、新たな英語教育の在り方を実現するために、研鑽を積んでいく必要があります。小学校外国語活動においては、平成32年度学習指導要領完全実施により、中学年より活動型の授業がはじまり、高学年では教科となります。今まで以上に、小・中・高の接続が大切になってきます。小学校の外国語活動で芽生えた「英語が好き・楽しい」気持ちをリレーのバトンとして受け取り、中学校での指導を通じて基礎力を付けながら走り、高等学校では更に力をつけるためのバトンを渡すというイメージを描くとわかりやすいと思います。

今後の先生方の活躍を期待しております。



「外国語活動の今後の取組や方向性について」

千葉県教育庁東上総教育事務所
指導主事 白井武彦

1 はじめに

社会のグローバル化が急速に進展し、学校においてもグローバル化に対応する教育を推進することが求められています。平成25年12月に文部科学省から「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表され、「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る。」と改革の方向性が示され、平成26年度から逐次改革が推進されています。

2 外国語活動教科化へ向けた動き

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では改革のスケジュールが示されています。平成28年度に小学校学習指導要領が改訂され外国語活動が教科化されることが決定した後、それを受け平成29年度に教科書の作成、平成30年度から新教材を使用した新学習指導要領の先行実施、平成32年度に全面实施と示されています。

平成26年9月に出された「英語教育の在り方の有識者会議」の「今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」には、小学校の「中学年から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」に加え、積極的に「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。そのため、学習の系統性を持たせるため教科として行うことが適当。」とあります。

また、平成27年8月の「中央教育審議会」の「教育課程企画特別部会論点整理」において、高学年は、
○アルファベットの文字や単語などの認識
○国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き
○語順の違いなど文構造への気付き
等を促す指導を行うために必要な時間を確保するため、年間70単位時間程度が必要であると示されました。

そして、これまでの外国語活動の成果や課題を次のように示しています（筆者整理）。

【成果】

- 児童が高い意欲を持つようになったり、外国語学習に肯定感を持ったりしていること
- 小学校で「聞く」「話す」を経験した中学生が、アルファベットを読むことや簡単な会話が中学校において役立っていると考えていること
- 外国語活動の充実により、児童・生徒の英語を聞いたり話したりする力の向上等から、指導する教員が肯定的に捉えていること

【課題】

- 小学校の外国語活動において音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていないこと
- 国語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題があること
- 高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり体系的な学習が求められること

3 今後の学校における取組について

外国語活動の成果と課題を踏まえ教科化が検討されてきました。教科化は、これまでの外国語教育の更なる充実を目指し行われるものと考え、小中学校において、必要な取組を行っていく必要があります。

(1) 小中連携及び小小連携

「論点整理」では、外国語活動で学んだことが中学校の学習に十分生かされていないことを踏まえ、小学校で慣れ親しんだ語彙や表現などの学習内容を、中学校段階において着実な定着まで高めることを求めています。

そこで、小学校と中学校及び近隣の小学校同士の連携を深め、お互いの学習状況等を伝え合い、小学校での学習内容を中学校での学習に生かしていくことが大切です。

本教育事務所では「小中連携推進会議」を実施していますが、各中学校区等において機会を捉え連携を深め、目標を共有していただきたいと思います。

(2) 研修の充実

ア 外国語活動について

これまでの外国語活動について、更に理解を深めていくことが重要です。現行の学習指導要領における外国語活動の目標の達成に向け、意義や授業の進め方、ICTの活用等、外国語活動の指導の在り方について専門性を高めていただきたいと思います。

また、他の小学校と取組について情報交換し、自校の実践につなげていくことも大切です。

イ 文字について

左記2のとおり、教科化された場合アルファベットを扱うことが示されています。文部科学省のWebページに「小学校の新たな外国語教育における補助教材の作成について」として、研究開発学校や教育課程特例校等で試行的に活用されている補助教材が掲載されています。検討途中ではありますが、文字指導のイメージをつかむことができます。

ウ 評価について

評価方法について、今後文部科学省から方向性が示されることが予想されます。

また、上記の教材には、小学校のCAN-DOリストが掲載されており、今後小学校においても導入され、評価に活用されることと思います。

現在、英語担当教員の指導力向上のため研修が行われています。文部科学省では「英語教育推進リーダー中央研修」を実施しています。この研修の受講者は県で実施する「中核教員養成研修」の講師となり、その受講者は校内研修の講師として各学校で研修内容を伝達するものです。

校内研修等では、この中核教員養成研修の内容を理解するとともに、これまでの外国語活動の成果を踏まえた上で教科化への研修を行うことが大切です。

4 終わりに

児童・生徒に外国語を使ったコミュニケーションの力を育てていくためには、校内体制を構築し学校全体で取り組んでいくことが重要です。外国語活動の教科化を踏まえた準備が必要ですが、現在の外国語活動を更に充実していくことが大切です。児童・生徒に達成感を味わわせ、積極的に英語を使ったコミュニケーションを図ることができる児童・生徒を育てていきたいと思っています。今後の情報にも御留意いただきたいと思います。

「児童が意欲的に取り組む外国語活動の実践について」

—外国語に親しむ機会の確保とコミュニケーション活動を通して—
長生村立八積小学校

1 研究主題

児童が意欲的に取り組む外国語活動の実践について—外国語に親しむ機会の確保とコミュニケーション活動を通して—

2 研究の概要

(1) 主題設定の理由

2020年新学習指導要領の全面実施にあたり、小学校中学年においては週1コマ活動型の時間を、高学年においては、週2コマの教科型の時間が導入されようとしている。本校のある長生村では、以前より5・6年生の外国語活動に加え、1年生～4年生までも月に1時間程度、活動型の時間を取り入れている。

このように低学年から外国語に親しむ経験を積み重ねてきた児童は、外国語活動に対してどのような意欲を持ち臨んでいるのか、コミュニケーションへの意欲(Willingness to Communicate : WTC)の観点から本校の実践をもとに検証した。

(2) 研究のねらい

低・中学年より外国語に親しむ機会を作ること、児童のコミュニケーションに対する意欲に違いがあるのか明らかにし、より良い指導のあり方を考察すること。

(3) 研究仮説

定期的にALTとかかわる機会を作れば、児童のコミュニケーションに対する意欲を養うことができるだろう。

(4) 研究内容

① ALTが定期的にかかわる機会があることによる意欲の違いの検証

長生村3校の5・6年生(長生村)と、茂原市内の抽出校(比較校)で比較した。長生村の3校はいずれも5・6年生の外国語活動だけでなく、低・中学年から各学年で、月に1時間程度ALTを交えた外国語に親しむ時間を確保している。対して比較校と抽出した茂原市内の学校は、5・6年生の外国語活動のみを行っている。

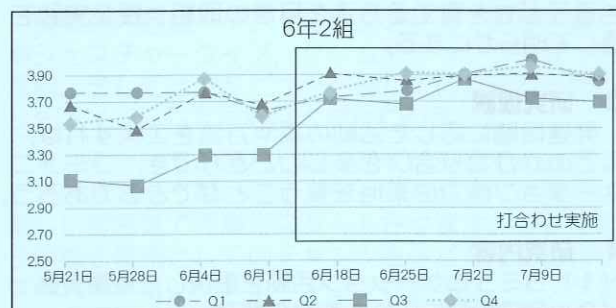
	低・中学年	高学年
長生村3校(長生村)	月1回程度(ALTあり)	外国語活動(ALTあり)
市内抽出校(比較校)	なし	外国語活動(ALTあり)

この低・中学年において外国語にかかわる機会が違う条件がどのようにコミュニケーションへの意欲に違いを見せるのか、全13問のアンケートによって比較した。その結果、高学年全体を比べた場合、長生村の小学校の方が、関心・意欲が高いことが分かった。学年毎に比較した場合、この差は5年生同士を比較した際に顕著であり、6年同士では、有意

な差は見られなかった。これは、低・中学年において、外国語に対する経験を積んできたことで、「聞いたことがある」「使ったことがある」という感覚が、高学年において意欲を高めてきたのだと考えられる。

② 外国語活動(外国語に親しむ時間)に対する毎時間の振り返りの検証

本校での外国語活動後に振り返りの自己評価を行った。5月～7月にかけての変容について調査した。



- Q1 楽しかったですか?
- Q2 先生や友達の話しを聞けましたか?
- Q3 すすんで英語を言えましたか?
- Q4 今日やったことはよくわかりましたか?

どのクラスも、Q3については他の項目と比べ低い傾向にあった。活動の様子を観察すると、練習した表現を実際に使う場面で、積極的に言えない児童が多く見られた。そこで、ALTと授業前に児童の実態を改善すべく打合せを持つようにした。児童が意欲的に話せる機会を作れる活動になるよう、相互に質問をするゲームなど、話す機会が増えるよう内容を組み替えていった。その結果、Q3の改善のみならず、授業に対する他の評価もともに改善していった。この結果を受け本校では、ALTと授業に対する児童の振り返りを共有し、また新たな改善を図っている。学級担任と、ALTとで、児童がより意欲的に臨めるようPDCAサイクルを実施している。

以上から、低・中学年から外国語に親しむ機会を持つことで、児童のコミュニケーションへの意欲を高められる可能性を見付けることができた。また、ALTとの打合せを密にし、児童の活動の様子から、改善策を学級担任とALTとで共有することで、児童の意欲の向上につながることも分かった。

就学前に幼稚園等で英会話等を行っている子どももいる。今後は、本校に就学してくる児童が保育所等でALTとのコミュニケーション活動を実践することができれば、児童の意欲をより高めていくことが出来るようになるのではないだろうか。

(文責 岡田 弘道)

「人とのかかわり合いを楽しむ子どもの育成」

～外国語の活動を通して～
茂原市立茂原小学校

1 はじめに

本校は、平成24年度から3年間、文部科学省の教育課程特例校の指定を受け、外国語活動（英語）の指導法について研究を進めてきた。今年度はさらに特例校の指定を継続し「人とのかかわり合いを楽しむ子どもの育成」を目指して、実践を積み重ねている。以下、その概要について述べる。

2 研究目標

人とのかかわり合いを楽しみながら、自分の思いを伝えたり、相手の思いを理解したりすることのできる子どもを育てる方法を日常の取組や授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

発達段階に応じた活動の場や方法を工夫すれば、人とのかかわり合いを楽しむことができ、コミュニケーション能力の素地を養うことができるであろう。

4 研究内容

- (1) コミュニケーション活動を重視した授業実践
- (2) 発達段階に応じた教材の開発
- (3) 外国語活動の日常化の取組
- (4) 小中連携授業の実施

5 研究の実際

- (1) コミュニケーション活動を重視した授業実践
本校では、授業実践にあたって、英語に慣れ親しむことができるキーワードゲームを多く取り入れている。一般的なキーワードゲームは勝敗がつくため、途中であきらめてしまったり、怒り出したりする児童も見られる。そこで、児童が活動を通して、よりかかわり合えるように、次のような工夫を行った。
ア キーワードゲームの工夫
従来のカードを取り合う方法ではなく、友達同士で協力して取り組めるよう、ゲームのルールを改善した。キーワードを聞いたら、ペアで手をつないで挙げたり、グループ全員で手を合わせたりすることで、友達とのかかわり合いを多くした。また、個人で行うゲームばかりでなく、友達と協力しながら行えるゲームを取り入れたことで、自信がもてない児童も安心して、ゲームを楽しめるようになった。
イ 子ども同士で認め合う活動
児童が英語でお互いを認め合う活動として、頑張った児童に“Good job !!”とジェスチャーを使って気持ちを表現させるようにした。誉められている児童も、誉めている児童も嬉しい気持ちになり、お互いを認め合う人間関係づくりができた。

(2) 発達段階に応じた教材の開発

学年の実態に応じたゲームやアクティビティーを開発し、茂原小オリジナルの「アクティビティー集」としてまとめている。

ア 低学年「食べ物の名前を知ろう」

店員役と客役に分かれ、買い物をする場面を疑似体験する。また、役割を交代することで両方の役を体験でき、やりとりを楽しみながら会話表現に慣れ親しむことができる。

イ 中学年「ハロウィンを楽しもう」

単語や会話表現が繰り返し使われる大きな紙芝居を作成した。ただ物語を聞くだけではなく、読み手の問いかけに対し、児童が単語や会話表現を発する場面を意図的に設けることで、児童は自然と英語に親しむことができる。



ウ 高学年「出国手続き疑似体験」

出国手続きコーナーを作り、係員と乗客役に分かれ、出国時のやりとりを疑似体験する。パスポートカードやスタンプも用意し、海外旅行の雰囲気を感じながら会話ができる活動の場を設定することで、児童が目的や意欲をもって活動することができる。



(3) 外国語活動の日常化の取組

- ア 各学年の年間指導時数
- 第1・2学年・・・15時間
 - 第3・4学年・・・20時間
 - 第5・6学年・・・35時間

イ 外国語活動デー

毎週水曜日を「外国語活動デー」とし、朝の会や帰りの会、昼の放送等を英語で行う。また、ELT及びボランティアと会食し、ふれ合う機会を設ける。

(4) 小中連携授業の実施

児童が進学する茂原中学校及び南中学校と連携した授業を実践している。中学校の英語科教員の専門性を生かし、チャンツやデモンストレーション等で発音を中心に指導する。児童は、正しい発音にふれることで、意識して会話するようになった。振り返りカードには、中学校での英語の授業を楽しみにしている等の感想も多く書かれていた。また、学級担任が日本語で直接打ち合わせすることができるので、より授業内容を深めることもできる。

6 おわりに

これまでの研究で積み重ねてきた指導案、教材、指導計画をもとに、全職員が自らの指導力を高めるために研究を行ってきた。今後は、学習指導要領の改訂による英語の教科化を見据え、高学年に導入されるであろう「書き」、「読み」の指導方法についてもさらに研究を深めていきたい。

(文責 関 里英子)

「外国語活動における中学校教諭の関わりを通して」

茂原市立南中学校

教諭 梶 原 大

1 はじめに

小学校において、2020年度より外国語活動が教科化されることになりました。小学校における外国語活動に関わる環境が大きく変わるとともに、私たち中学校における外国語の授業においても、影響を受けることと思われます。「中1ギャップ」が叫ばれて久しい中、小学校と中学校の連携の重要性はますます高まっていくものと考えられます。

昨年度、茂原小学校の外国語活動の補助という形で、茂原中学校と南中学校から英語科教諭が一緒に授業を行いました。その際に感じたことや授業での様子などを、中学校からの視点でまとめてみたいと思います。

2 茂原小学校における研究

今年3月に発行された「茂原教育 第3集」によると、茂原小学校は、平成21年度は文部科学省から、平成22年度は千葉県教育委員会から「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方に関する実践研究事業」の指定を受け、さらに平成24年度からは教育課程特例校として、1・2年生で年間10時間、3・4年生で年間20時間、5・6年生で週1時間の外国語活動を実施しました。加えて平成27年度は1・2年生が年間15時間、3・4年生が20時間、5・6年生が35時間、実施しています。児童はチャンツやゲーム等のコミュニケーション活動を通して友達と積極的に関わり、そうした活動を通して「他者との関わり合いを大切にしたい授業実践」を目指しています。

実際、茂原小学校を訪れると、生徒たちはいきいきとした表情で活動を行う姿が目に見え、廊下ですれ違えば心地よい挨拶をしてくれるなど、日頃の授業実践で目指している児童像が表れているという印象を強く受けました。

また、茂原小学校は私自身の母校ということもあるため、自分が児童だった頃に比べて（当時は外国語活動という時間は当然ありませんでしたが・・・）、今の子どもたちの積極的な活動への参加姿勢は、日々の実践が功を奏し、人間形成にも良い影響を与えているようにも思えました。

3 ALTとしての外国語活動への関わり

平成26年11月6日、茂原市教育委員会研究指定校の公開授業として、6年2組で行われた授業公開において、ALTという立場でお手伝いをさせていただきました。当日は東上総事務所管内の多くの小学校・中学校からの先生方を中心に、多くの方々が参観に来られ、小中連携の授業への関心の高さが伺えました。

この公開に先立って、実際に茂原小学校を訪れ授

業を行ったのが3日間。この3日間でクラスの様子や留意点、さらには検証授業を行うことでの当日への準備をするとともに、授業を行った後に、当時6学年担任の先生方や高学年の先生方と指導法等についての話し合いを持ちました。小学校の先生方と中学校の英語教諭がこうした形で授業を作り上げていくという機会自体がなかなか無く、小学校の先生方の外国語活動にかける真摯な取り組みを肌で感じる良い機会になりました。中身の濃い、貴重な意見交換の場となったことを覚えています。

授業の内容は、デジタル教材を使っただけの聞き取りやジェスチャークイズ、ゲームやチャンツを使った活動、そしてインタビューを通しての友達との関わりをメインにした活動などが行われました。

ALTとしての関わりは、まずは英語での挨拶でした。元気いっぱいジェスチャーを交えての挨拶は、楽しい雰囲気です。そして電子黒板を使用としてのチャンツを子どもたちと行い、ゲームのデモンストレーションを説明し、インタビューの手助けを行いました。ALTという立場なので、指示や賞賛、生徒からの質問の返答もすべて英語で行いました。

英語を使っただけの授業は中学校でももちろん行っています。しかし、全編All Englishの授業展開は、中学校3年生の授業で行ったことはあるものの、小学生相手となると使う表現もできるだけわかりやすく簡単なものを選ばなければというプレッシャーを感じていました。しかし、児童は普段通りに接し、理解していました。そこにはもちろん、小学校の先生がT1として細かく説明してくださったことが大きかったというのが本当のところだと思います。普段から英語に慣れ親しみ、コミュニケーションをとることを苦にしない環境が育っているように感じました。

4 おわりに

今回、縁あって小学校の外国語活動に参加させていただき、改めて小中の連携をスムーズに行うことの重要性を認識しました。多感な時期の子どもたちを、小学校・中学校の先生が協力して指導にあたることで、中1ギャップの解消とともに、違和感なく英語活動から英語科への移行が行われると信じています。確かに時間の確保や内容の精選など、課題が多いのも事実ですが、定期的な交流を慣例化することで、その潮流がスタンダードとなることを期待したいです。そして何よりも、児童・生徒が外国語に慣れ親しむ素地を作り、運用していくための有意義な活動として、積極的な中学校教諭の小学校外国語活動への関わりを推進していければ、より幅の広い人物育成へとつながっていくのではないのでしょうか。

「外国語指導について」

～小・中連携を含めて～
市原市立辰巳台中学校

1 本校の紹介

本校は普通学級20、特別支援学級3、生徒数676名の学校である。学区には3つの小学校がある。「自立・協働・貢献」を教育目標に掲げ、生徒は授業、生徒会活動、部活動など、落ち着いた環境の中で学習活動を行っている。

2 外国語指導

本年度、「第39回関東甲信地区中学校英語研究協議会（関プロ）」が本県で開催され、本校は第3分科会の会場として、「小・中連携」をテーマに1学年の授業公開と県外提案による研究協議会が行われた。

市原支会としては22校の中学校から小学校外国語活動との関連を図った授業実践の事例を持ち寄り、参加者への資料提供を行った。また、市原市教育センターを通じて小学校外国語活動部会との連携を図り、市内の先進的な授業を映像資料として提供した。

本校では、本年度の英語科の研究テーマを「小中連携を生かした指導の工夫」とし、Hi, friends!などを生かした活動をどのように授業に取り入れるかを研究している。そのために、小学校の授業参観や担当者間の情報交換を通じて学区の3小学校で行われている外国語活動の実態を把握し、言語材料や指導方法で活用できるものを授業に取り入れている。



〈関プロ 授業風景〉

関プロでは、「道案内」の授業を展開した。外国語活動で学習した表現を生徒に想起させ、それに中学校で学習する表現を追加する形で、より正確に道案内ができることを理解させ、運用できるような活動を取り入れた。指導方法のひとつとして、外国語活動でよく行われているチャンツを活用することで、言語材料の定着を図った。

3 関プロでの授業から

本校では外国語指導における小中連携は、シンプルに外国語活動で実践されていることを活用することをコンセプトとして、可能な範囲で授業を工夫している。今回の授業で行った「道案内」は、Hi, Friends!にある言語材料を発展させる内容であるため、その活用がしやすいものである。生徒にとっては以

前に見聞きした英語が導入として使われることにより、安心感が生まれ、その上に中学生の学習内容が加わることで意欲の向上が図られたと思われる。

外国語活動の活用は毎授業で考える必要はない。生徒の実態に合わせて、効果的な学習が期待できる単元で、言語材料、指導方法、学習形態などを考慮して、無理なく活用することが望ましいであろう。留意しなければならないことは、外国語活動の学習は定着を目指してはいないので、中学校で活用する際に、生徒が外国語学習の内容を理解していることや、学習したこと自体を覚えていることを想定して、生徒の学習意欲の減退を招かないようにすることである。今回の授業では、その点に配慮されており、生徒は既習事項を肯定的にとらえ、意欲的に学習に取り組んでいた。

4 コミュニケーション能力の育成を考える

平成元年に告示された学習指導要領の外国語の目標に、「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」という文言が明記されて以来、コミュニケーション能力という語がキーワードとなり、英語の授業が変わってきた。そして、5年前に導入された外国語活動の目標にも、また、一昨年に文科省が公表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」においても、小・中・高校すべての目標の中にそのキーワードがある。

この20年余り、中学校の英語教員は様々な研修などを通じてコミュニケーション能力の育成を目指して指導力の向上を図り、授業を展開してきたが、再び四半世紀前と同じ目標が掲げられた。

現在、小学校5年生から高校3年生までの英語の授業数は1000回程度であり、1授業時間を50分とすると、833時間となる。生活言語として英語が使われていない環境で、英語とは全く異なる日本語の母語話者が833時間程度の授業を8年間にわたって受けてもコミュニケーション能力の一部である英語運用能力さえ身につけることは容易ではない。また、中学生が感じる英語学習の苦手分野の上位には、文法と英文を書くことが挙げられている。

言語学習の指導ではコミュニケーション能力の向上は常に追求しなければならない。しかし、今一度この目標について考えることが必要であろう。コミュニケーション能力とは何か。流暢に英語を使って話すことができればよいのか。生徒の実態に沿って、何を目標にするのか。今までの指導の改善点はどこにあるのかなどを検討することが大切である。

コミュニケーションの意味を狭く解釈せず、基礎基本をしっかりと教え、発達の段階に応じて4技能をバランスよく指導することが大切である。すべての英語教師は、学校で英語の学びの楽しさを知り、学び方を教わり、大人になって必要に迫られたときに自分で努力して使えるレベルに高めてきた筈である。目の前の生徒も同じことを求めているのではないか。

長生郡市教務主任研修会報告

本年度は現在までに4回の「長生郡市教務主任研修会」を開催しました。年明けに5回目の研修会を実施します。今年度は新しく教務主任になられた方がとても多く、全体を見ても1,2年目の方がほとんどでした。そこで、より身近な課題について自分たちで考える事を中心とした研修を行うことを計画し、実施しました。

【全体研修】

○第1回

東上総教育事務所 指導室 主席指導主事
狩野 久志 先生
(東上総の教育的課題・学校訪問の充実に向けて)

○第2回

日頃の課題について各グループごとの話し合い

○第3回

課題や悩みについて先輩教務主任に聞く

○第4回

課題や悩みについて先輩教務主任に聞く

○第5回 (平成28年1月に実施の予定)

【部会別研修】

小学校部会



1 テーマ

「各学校でかかえている課題や問題点」について

2 話し合われた内容

- ・授業時数の管理
- ・週指導計画について
- ・通知票・指導要録について
- ・職員会議の合理的な進め方
- ・若手職員の育成
- ・初任者研修について
- ・学力向上

中学校部会

1 テーマ

「教育課程編成上の課題」について

2 話し合われた内容

- ・企画委員会・職員会議
- ・コマ組みのソフト活用について
- ・初任者研修について
- ・適正な授業時数の確保について
- ・若手職員の育成
- ・週報の作成

長期研修生の授業公開より

長期研修生の授業公開について、紹介いたします。

<数学科>

茂原市立東中学校

教諭 中舘 武優 先生

思考力・表現力を育む学習指導の在り方

～「一次関数」における既習事項と関連

付けて学習していく活動を通して～

本研究では、既習の学習と新しい学習内容を関連づけることにより、基礎・基本の定着と思考力・表現力の育成を目指す学習指導の在り方を探りました。

事象を一次関数とみると、変化の割合が一定となることが生徒にとって前提となります。しかし、自然現象や社会現象を考察する際には、データの傾向から直線とみなして課題を解決する場面が多く、必ずしも変化の割合が常に一定となる場合ばかりではありません。そこで、直線的な変化をする事象としてダイアグラムを取り上げることにより、一次関数として処理をすることのよさを数学的活動を通して実感させたいと考えました。

授業では、ダイアグラム上で運行状況を直線であると理想化して捉えると、能率よく処理できることが一次関数のよさであることを意識させました。思考過程を説明することにより、一次関数とみなすことのよさを知り、一次関数の有用性を実感できるよう展開を工夫して実践を行いました。



<美術科>

茂原市立茂原中学校

教諭 山口 晋 先生

生徒の表現力を豊かにするための題材開発

～身近な素材を生かした教材開発と

年間指導計画の構築を通じて～

自ら表現を追求する生徒の育成を目指して題材開発を行った。身近な素材から表現の材料を作り、「私の大切な場所」をテーマに造形活動を展開した。生徒の豊かな発想を引き出すために、材料の感触やイメージマップを活用して触覚や言葉から作りたいイメージを具現化させていった。「つくりながら考える」を声かけのキーワードにして、試行錯誤しながら制作する姿勢を育成したいと考えた。実際の活動で生徒は、とても意欲的に表現活動に取り組むことができた。グループ形態での個人制作だったため、生徒は友だちと意見を述べあったりしながら自己の表現を追求することができた。毎時間のふりかえりでは「もっとやりたい」「楽しくて時間がはやい」という記述が見られ、「自ら」活動している様子が伺われた。本題材を通じて、自分を表現することの喜びを感じとらせることができた。



研究所各部の活動紹介

ここでは、長生教育研究所各部の活動について紹介させていただきます。

情報部

研究主題

研究の深まりと校務の効率化を目指して

研究内容

多忙を極める教員の仕事を少しでも効率的に進めることができるよう、小学校の指導要録をパソコンで入力・印刷できるファイルをEXCELで作成しています。現在、大まかな形はできていますが、入力作業を少しでも効率よく進めるために、通知票・補助簿のファイルを参考に作成できるよう入力形式を検討しています。まだまだ、問題点も多々ありますがご意見をいただきながら改善を図っていきたくと思います。年度末には活用できるよう準備を進めていますので、ぜひご活用ください。

調査部

家庭学習の実態・意識に関する調査研究

全国学力・学習状況調査によると、次の①、②にあてはまる児童生徒は、すべての教科で平均正答率が高いことが、明らかになっている。

①基本的な生活習慣が確立している。

「毎朝朝食を食べている」「毎日同じくらいの時刻に寝たり、起きたりしている」「スマートフォン等でメールやゲームをしている時間が短い」等

②学習習慣が確立している。

「家庭学習の時間が長い」「計画的に勉強している」「授業の予習、復習をしている」等

調査部では、茂原市・長生郡内の小学校2、4、6年生と中学校2年生について家庭学習に対する児童生

徒の意識・実態調査を行いました。これら进行分析し、特徴や傾向を明らかにすることで、家庭学習の充実に向けての取り組みや保護者への働きかけについて考察していきます。

現在、調査結果を以下の2つの観点で集計、分析し、研究紀要第4集「家庭学習の実態・意識に関する調査研究」としてまとめていく予定です。

(1) 全国学力状況調査と長生郡市の小中学校との比較基本的な生活習慣と学習習慣について、全国と比較、検討を行います。

(2) 学習習慣を確立するために必要な要素の検討
学習習慣が身につけている児童生徒と身につけていない児童生徒とはどのような点で相違があるのか、比較、検討を行います。

調査にあたり、各校のご協力をいただきましたことに感謝申し上げます。

研修部

研究所研究紀要発表会及び長期研修生報告会が平成27年8月10日(月)に長生教育会館において開催されました。ご多忙の中、多数の先生方のご参加をいただきありがとうございました。

研修部では、7月、12月、3月の年3回の「研究所だより」を発行しています。7月に発行された第139号では、各学校の「研究主題と研究仮説」についてご紹介させていただきました。また、今回の第140号では、「外国語教育」の在り方や取り組みをご紹介いたしました。これからも先生方のためになる研究所だよりを目指し努力して参ります。先生方のご意見をお聞かせください。よろしくお願いいたします。

教育功労表彰

掲載順につきましては、表彰式の名簿順とさせていただきます。(敬称略)

○春の叙勲 瑞宝双光章 山田 一夫
瑞宝双光章 石井 信照

○秋の叙勲 瑞宝双光章 武内 克二

○千葉県教育功労者表彰

〈学校教育の部 個人の部〉

茂原市立萩原小学校 校長 糸井 仁志
白子町立白子中学校 校長 太田和晴彦

〈学校教育の部 団体の部〉

茂原市立茂原小学校

○茂原市教育功労者表彰者

元茂原市教育委員会委員 足立 俊夫
茂原市立萩原小学校 校長 糸井 仁志
茂原市立東中学校 校長 松浦 光俊

茂原市立鶴枝小学校 教諭 久我 信子
茂原市立鶴枝小学校 教諭 河野 智子
茂原市立萩原小学校 教諭 清水和香子
茂原市立二宮小学校 教諭 柴崎 和子
茂原市立東中学校 教諭 白井 信孝
茂原市立東中学校 事務長 金子美智子
茂原市立富士見中学校 教諭 湯原 好子
茂原市立早野中学校 教諭 野々山 祐子
茂原市スポーツ推進委員 宇野 瑛子
茂原市スポーツ推進委員 出口 富士子
茂原市社会教育委員 河野 通貞
元茂原市青少年補導員 中村 好一
茂原市青少年相談員 藤 雅則
茂原市青少年相談員 林 勝子
茂原市文化財審議会委員 齊藤 望